

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

『倭訓栞』における仮字反

前
田
由
香

『倭訓栞』における仮字反

はじめに

谷川士清（宝永六年（一七〇九）—安永五年（一七七六））によって編纂された『倭訓栞』には、古語や雅語を初め、地名・本草・鳥獸・有職故実・方言・外来語など多種多様な語彙が収載されている。その項目の説明のほとんどには、典拠となる資料名やその説を述べたと思われる人名が記されており、『倭訓栞』には多様な資料が用いられていることが分かる。ただし、凡例に「多くは書名を著さず唯といへりと書せり。煩しきをいとひてなり」とあるように、全ての記述に典拠が記されているわけではなく、省略されていることも多い。その中には、典拠が明記されていないとも何を引用したものか判明している箇所もあるが、そうでない箇所も多くある。その内の一つが仮字反である。

仮字反とは、『日本国語大辞典』の「かながえし」の項目に「中国の反切法を国語に応用して「き」は「か・い」の反、「く」は「か・う」の反というように、一音の仮名が二音の反切により成り、また逆に、二音が一音に縮約するというように考えること。中・近世、一つの理論として歓迎され、これを利用して上代語

の約言現象や語源を説明しようと試みた者もあった。」とあるように、中・近世に国学者などの間で用いられた、語形の変化・交替を説明する方法である。この仮字反が『倭訓栞』にも用いられているが、「あ」で始まる見出し語（「あ」の部）を調査した限りでは、その典拠は示されておらず不明である。

それでは、『倭訓栞』における仮字反は士清自身の説なのだろうか。あるいは何か典拠となるものがあるのだろうか。この仮字反は、人によって表記の仕方が異なり、語源の解釈によってその説明も当然違ってくる。学問系統によって異なるものと思われる。『倭訓栞』の学問系統についてはこれまであまり述べられていない。学問系統を明らかにすることで、編集過程の複雑な『倭訓栞』の編集方針が分かるのではないだろうか。

『倭訓栞』は、編者の士清が整版本（第一回）刊行の前年に亡くなったため、その後は子孫や門人によって編纂され、五回に分け一〇年かけて刊行された。その間に項目の説明にも後人の手が入っていると推測され、整版本全てに士清の考えが反映されているとは言えない。士清の考えを知るには士清の生前に成った稿本を見る必要がある。稿本はいくつかあるが、整版本

前田 由香

刊行直前の状態を残す清逸本（天保一〇年（一八三九）成立）が整版本に最も近く、土清の考えを反映していると思われる。

土清の考えが『倭訓栞』にどのように反映されているかを探るため、本稿では、『倭訓栞』における仮字反の典拠を手がかりに、土清がどのような学問系統に属しているのかを探ることとする。

なお、本稿において、引用中の傍線は引用者による。また、引用の際には適宜句読点を付し、漢字の表記は原則として現行通りに改めた。

一、『倭訓栞』における仮字反の表記法

『倭訓栞』では、仮字反について次のように説明している。

○豎を音とし横を韻とす。同音相通同韻相通といふ是也。……

○仮字反の法反すべき二字の内上を父字とし下を母字とす。二字同韻ならば父字に帰し二字同音ならば母字に帰す。是を横帰本堅留末といふ。きえ反けしか反さの類は父字同音の上か下かにて母字同韻にあたる字を帰字とす。是を父字の上下母字の横といふといへり。

（『倭訓栞』整版本前編卷一・二五ウ―二六オ）
『倭訓栞』において、仮字反は「きえ反け」「しか反さ」のよ

うに表わされる。大綱によれば、上の字（「き」あるいは「し」）を父字とし、下の字（「え」あるいは「か」）を母字とする。例えば、「きえ反け」の場合、「父字同音の上か下か」とは、父字である「き」の上下、つまり五十音図の豎の行（ここではカ行）を指す。「母字同韻にあたる字」とは、母字である「え」の同韻、つまり五十音図の横の列（ここではエ列）を指す。その両条件にあたる「け」が「帰字」であることを表わしている。「しか反さ」も同様である。

また、土清は『倭訓栞』の編纂以前にも仮字反の説を用いている。『倭訓栞』以前に書かれた『鋸屑譚』（延享四年（一七四八）九月一七日初稿成る）に、一例ではあるが仮字反が見られる。

海鰯魚。此云衣比。和名からいひ。蓋唐海鰯魚也。今略してかれひといふ。良比の反シ礼の音なればなり。

また、『倭訓栞』の初稿段階の稿本である自筆本（延享五年（一七四八）から宝暦二年（一七六二）の間に成立⁸⁾）においても仮字反が用いられており、それが編纂途中の稿本の写しである清逸本、そして整版本にも引き継がれていることが（例一）から分かる。

（例一）

あした したノ反さ也。あさとおなし。

（自筆本『倭訓栞』巻一・一九オ）
あした 朝旦などをよめり。したノ反さ也。あさと同じ。
……古今集に片岡の朝の原と見えたり。

（清逸本『倭訓栞』巻二・六五ウ）

あした 朝旦などをよめり。した反さ也。あさと同し。
……其先は源ノ頼信より出。

(整版本『倭訓栞』前編卷二・一七ウ)

このように、稿本から整版本まで仮字反の説が引き継がれている一方で、整版本において、清逸本と仮字反の説が異なる場合がある。

(例2)

あかゞり 倭名鈔に輝をよめり。垢にきらるの義。きら反か也。催馬楽にあかゞりふむなしりなる子と見えたり。篠葉集にあかゞりも春はこし路にかへれかし冬はなにはのあしに住とも。

(清逸本『倭訓栞』卷二・二二オー一二三ウ)

あかがり 倭名抄に輝をよめり。垢にきらるの義。らる反か也。催馬楽にあかゞりふむなしりなる子と見えたり。篠葉集にあかゞりも春はこしちにかへれかし冬はなにはのあしにすむとも。

(整版本『倭訓栞』中編卷一・五ウ)

(例2)において、清逸本での「きら反か」は、「あかにきらる」の「きら」が「か」となり、「あかにかる」から「あかかり」と変換することを指していると思われる。一方、整版本では「らる反か」となっているが、仮字反の考え方から見ると、「らる」の反しは「か」にはならない。仮に「らる反か」が成り立つとしても、この説は「あかがり」の説明には適さない。したがっ

『倭訓栞』における仮字反

て、清逸本の「きら反か」が正しく、整版本の「らる反か」が誤っていると言える。この整版本における仮字反の誤りは、説を理解している者が清書なり版なりを見ていれば起こらないのではないか。整版本の誤りは、原稿の校正段階か彫工のミスかは分からないが、仮字反の説を理解していない者によって起こったと考えられる。

『倭訓栞』は刊行にあたって、前述したように、子孫や門人などの手が入っているが、その過程で誤字脱字のような単純なミスから、(例2)のような説の誤りなどが起こっている。それによって、土清の説が正しく反映されていない箇所が少なからず存在すると思われる。整版本における仮字反の誤りは、「あ」の部ではこの一例のみであるが、仮字反以外にも、誤字・脱字や、「続後撰集」とあるべきところを「後撰集」と誤るなどの出典の誤り(「あきつしま」整版本『倭訓栞』前編卷二・九ウ)など、整版本で誤りと思われる例が幾つか見られることから、このような仮字反の誤りが他にもないとは言えない。整版本において、このような仮字反の誤りが複数見られるのであれば、土清の考えとして誤った説が伝えられていることになる。

『倭訓栞』の見出し語の説明は、多種多様な資料を典拠としている。ただし、凡例に「多くは書名を著さす唯といへりと書せり。煩しきをいとひてなり」とあるように、引用した出典名を省くことも多く、一見して典拠を特定できない場合も多い。仮字反の説についても典拠を示す記述は見当たらない。このこ

とから、『倭訓栞』の仮字反は、土清の独自の説であるとも考えられるが、『倭訓栞』に多様な資料が引用されていることと、仮字反が他の資料にも見られることから、土清が典拠とした資料があると考ええる方が自然であろう。

そこで、『倭訓栞』の仮字反の典拠を探るために、土清が影響を受けたであろう語学研究書から仮字反に関する記述に注目して、『和字正濫鈔』『東雅』『日本釈名』を取り上げ、『倭訓栞』の内容と比較する。

二、『和字正濫鈔』と『倭訓栞』

『和字正濫鈔』(元禄八年(一六九五)刊)は、契沖による仮名遣い研究書である。

『倭訓栞』に『和字正濫鈔』を典拠とする記述があることは、上田萬年氏や三澤成博氏等によってすでに明らかにされている。

『倭訓栞』の本文中には、「契沖説には……」や「……と契沖いへり」などとして、『和字正濫鈔』の説が引用されている箇所がある。なお『倭訓栞』では、典拠となる書名や人名を省いて引用するという、出典の表記法の傾向から、本文中に「契沖」あるいはその書名が記されていないことも『和字正濫鈔』を引用している箇所が存在する可能性もある。

それでは『倭訓栞』の仮字反の説に関して、『和字正濫鈔』の影響はあるのだろうか。まず、『和字正濫鈔』の語形の変化・交

替に関する説明に仮字反が用いられているかどうかを見ると、次の(例3)のように、「保阿ノ反波」と仮字反が用いられている例がある。

(例3)

塩穴 しはな 和泉國大鳥郡あり。これはしほあなといふへきを、保阿ノ反波なればつゝめてかくいふなり。……

(『和字正濫鈔』巻四「中下のわ」(三〇〇頁))

以上のように、『倭訓栞』に『和字正濫鈔』が引用されていることと、仮字反が使われていることから、『和字正濫鈔』の仮字反の説が『倭訓栞』に取り入れられていることは大いに考えられる。そこで、その可能性について検証したい。

『和字正濫鈔』と『倭訓栞』において用いられている仮字反の内容が共通している例は、『倭訓栞』の見出し語で言えば、「あふみ・かくなは・くれなゐ・たらひ・ときは・なり・はいと・ふもだし・おふち・かふち・しきは・てへり・とほたあふみ・なかとみ」の一四例であった。

例えば、次の(例4)では、「磐石」(『和字正濫鈔』)と「ときは」(『倭訓栞』)の項目で、仮字反の内容がほぼ同じである。なお、『和字正濫鈔』では仮字反を示すのに「反」あるいは「切」を用いる。一方、『倭訓栞』は「反」のみを用いる。

(例4)

磐石 ときはかきは 日本紀延喜式等にはときはにかきは
にともいへり。常磐を古伊ノ切幾なればときはとい

ふ。……

『和字正濫鈔』卷四「中下のは」(二九四頁) ときは 常磐と書り。とこいはをこい反きなればときはと いふ。……

(整版本『倭訓栞』前編卷一八・五〇—ウ) 仮字反の説はそれぞれ「古伊ノ切幾」「こい反き」とあり、ともに「とこいは」が「ときは」となることを示す。

次の(例5)では、「結葉」(『和字正濫鈔』)と「かくなは」(『倭訓栞』)の項目で、仮字反の説とその周辺の記述が共通している。

(例5)

結葉 かくのあわ 和名にかくあり。江次第には加久縄とかゝれたり。乃阿切奈なれど縄はなはなれは、わとはとかなたかへり。古今集の長歌にかくなはに思ひみたれてとよめるも江次第の定なり。沫の仮名万葉にも和名にもあわなれと、又万葉第二には安播ともかゝれたれば、同韵相通歟。走の字はしるともわしるともよめり。これらに准らへて知へし

(『和字正濫鈔』卷四「中下のわ」(二九〇頁))

かくなは 倭名鈔に結葉をかくのあわと訓せり。からくだものゝあぶら物也といへり。香菓の沫といふ義にや。江次第には加久縄と書り。古今集にはかくなはにおもひみたれてとよめり。のあ反な也。はわ相通せり。其形の称ぢたるさまは縄ともいふへし。されと万葉集倭名抄なと

『倭訓栞』における仮字反

は謬らす。

(整版本『倭訓栞』前編卷六上・一三〇) 仮字反の説はそれぞれ「乃阿切奈」「のあ反な」とあり、ともに「かくのあわ」が「かくなは」となることを示す。また、典拠として「倭名鈔」「江次第」「古今集」をあげている点、仮名遣いに言及している点も同じである。

(例4)(例5)のように、『和字正濫鈔』と『倭訓栞』の仮字反の説に関する記述が共通しているため、『倭訓栞』の仮字反の説が『和字正濫鈔』を典拠としている可能性が考えられる。

ところで、次の(例6)のように、『倭訓栞』には『和字正濫鈔』と共通する箇所以外にも仮字反の説を用いた項目も多く存在する。

(例6)

價 あたひ あたるあたふあたはす皆一類也

あたひ 直ノ字をよめり。物のねをいふ也。当易の義。てか反た也。字書に直は準当也と見えたり。延喜式に估もよめり。價も同じ。……

(整版本『倭訓栞』前編卷二・二四〇)

これは同じ語「價(あたひ)」に関する項目であるが、『倭訓栞』には仮字反があるが『和字正濫鈔』には仮字反の説明自体がない。また、仮字反以外の記述を見ても両者の説明に共通性は見られない。したがって、この「價(あたひ)」の項目は互いに関連がない。(例6)のような例は他にも多くあり、このような場合

には『倭訓栞』は少なくとも『和字正濫鈔』は参考にしていないと言える。

以上より、『和字正濫鈔』において、(例4)のように、仮字反のみが共通する場合は、『倭訓栞』の典拠であるか否か断定はできないが、(例5)のように仮字反の説だけでなく、その周辺の記述も共通する場合には『倭訓栞』の典拠である可能性が高い。ただし、(例6)のような例を考えると、『和字正濫鈔』が『倭訓栞』の全ての仮字反の典拠とは言えない。

三、『東雅』と『倭訓栞』

『東雅』(享保四年(二七一)脱稿)は、新井白石による語源辞書である。¹⁾

『倭訓栞』に『東雅』を典拠とする記述があることは、すでに赤堀又次郎氏、上田萬年氏、三澤成博氏等によって明らかにされている。²⁾

『倭訓栞』には、「新井氏の説に……」や「新井氏は……」として典拠を示して『東雅』を引用している箇所がある。なお、前述したように『倭訓栞』の出典の表記法の傾向から、本文中に「新井氏」あるいはその書名が記されていないことも『東雅』を引用している箇所が存在する可能性があり、仮字反についても同様のことが考えられる。

『東雅』の本文中には、「AB反C」のような『倭訓栞』と同

じ形式での仮字反を説明した箇所は見当たらないが、語源の説明の中に仮字反と共通する説明の仕方が存在する可能性はある。語形の変化・交替について『東雅』総論には、貝原益軒による『日本釈名』(元禄二年(一六九九)成立)の説について論じている箇所がある。『日本釈名』では語形の変化・交替を「略語」「転語」「反語」「借語」として説明しているが、『東雅』の説明はそれに依らない。

例えば、『日本釈名』で「反語」と説明される語について、『東雅』では次のように述べる。

(例7)

又「反語とはかな返しなり。見ゆを^メ目とし。きえを^メケとし。やすくきゆるを雪とするの類也」といふなり。古語に目をばマといひけり。マといふ語の転じて^メといひし如きは。或は方言の同じからぬにもやよりぬらむ。見るといひ。見ゆといふが如きは。マと^メといふ言によりて。いひし所にぞあるべき。もしミといふ語を転じて。目といひしならむには。耳を^ミよびてミミといふが如きは。またいかにやあるらむ。古語に消ゆるをばケといひけり。ケといふ言葉を緩く呼びし音の。開きてキエとはなりしなり。雪をユキといひしは。其色の白きをいひしことばなり。詳に雪の注に見えたり。是等の語も。並に太古の時より聞えたりけり。其代の比ほひ。切韻の学などいふ事の伝りてや。ヤスの音を反してユとなし。キエの音を反してケとなし。ケの音を転

じてキとなし。ユキといふ事のあるべきにもあらず。是等の説の如き。其世を論ずる事にも及ばず。後代の事をもて。太古の事を説きぬるが致す所とこそ見えたれ。

〔東雅』首巻総論（一二頁）

『日本釈名』では、「反語」は「かな返し」だという。例えば、「見ゆ」が「目」となること、「きえ」が「け」となること、「やすくきゆる」が「雪」となることをいう。『東雅』では、これらの語形の変化を「転じて」「緩く呼びし音」「開きて」などと表わし、『日本釈名』でいう「反語」は後代に成った説であつて、これを用いて「反語」が成立するより以前からある古い語について説明するべきではないとする。

このように、『東雅』は語形の変化・交替を説明するとき、『日本釈名』の説には批判的で、それぞれの語に応じて「開呼び」「緩く」「急にし」「転ぜし」「転じて」「転声」「転語」などの『日本釈名』とは異なる解釈を用いている。

それでは、『東雅』における語形の変化・交替に関する説明と『倭訓栞』の仮字反の説の関係はどのようになっているののだろうか。

次の（例8）は、「け」（消）について述べた箇所である。

（例8）

古語に消ゆるをばケといひけり。ケといふことばを緩く呼びし音の。開きてキエとはなりしなり。

〔東雅』首巻総論（一二頁）

『倭訓栞』における仮字反

け 気をけとよむは訓也。……○消をよむはきえ反け也。伊勢物語に消なほ消ならんと思ゆ。……

（整版本『倭訓栞』前編巻九・一〇―ウ）

『東雅』では、「け」が「消ゆる」になるとして語形の変化を説明している。一方『倭訓栞』の「け」の項目では、仮字反を用いて、「きえ」（消）の反しが「け」であるから「消」を「け」とよむ、と述べ、語形の変化を説明している。両者ともに語形の変化を説明しているが、『東雅』では「け」が変化して「きえ」となったとし、『倭訓栞』では「きえ」が変化して「け」となったとして、両者で説明が異なる。

『東雅』において語形の変化・交替を説明するとき、『倭訓栞』とは説明の表現方法が異なり、また語源の解釈も異なることが多い。たとえば語源の解釈が同じでも、前述の『和字正濫鈔』に比べて周辺の記述に『倭訓栞』との関連が見られないため、仮字反に関しては典拠であるとは考えにくい。「新井氏の説に……」などと記されるように、『倭訓栞』が『東雅』の説を用いているのは明らかだが、仮字反を用いて説明する場合には『東雅』の説を参考にしていないと考えられる。

四、『日本釈名』と『倭訓栞』

前述したように、『日本釈名』は『東雅』において批判の対象となつている。『倭訓栞』は仮字反の説に関して『東雅』の説を

用いてはいなかったが、逆に考えれば『東雅』で否定された『日本釈名』の説を引用している可能性はないだろうか。

『倭訓栞』の本文中には「貝原氏」と記される箇所があり、それが貝原益軒の説を指していると考えられる。ただし、三澤成博氏によれば、『倭訓栞』中の「貝原氏」は貝原益軒による本草書『大和本草』からの引用である。『倭訓栞』に『日本釈名』が引用されているかどうかは不明であるが、『倭訓栞』における出典の表記法の傾向から、典拠が明記されていない箇所には『日本釈名』の説が引用されている可能性もあるのではないかと。

また、『日本釈名』の凡例には次のようにある。¹³⁾

○六に反語はかな返し也。はたおりを服部とし、かるがゆへをかれとし、かれをけとし、ひらを葉とし、とをつあはうみをとをたふみとし、あはうみをあふみとし、きゑをけとし、みへをめとし、やすくきゆるを雪とするの類多し。

(『日本釈名』凡例・二〇一ウ)

『日本釈名』では、語形の変化・交替を説明する方法の一つとして、「反語(かな返し)」が用いられており、それを「反」「反字」「返し」「返し」「かへし」のように表わしている。これは、『倭訓栞』にある仮字反と同様の役割を持つものと考えられる。

ここでは、『日本釈名』において「反語(かな返し)」の説がある項目を中心に『倭訓栞』との比較を行い、『倭訓栞』の仮字反の説に影響があるのか考察する。なお、仮字反の説の用例数については、項目数でなく『日本釈名』を基準にして『倭訓栞』

と対応する箇所につき一例と数える。

『日本釈名』に仮字反の説は三五例あるが、『倭訓栞』と説が共通する例はそのうちの七例である。

次の(例9)は、「紅」(『日本釈名』)と「くれなる」(『倭訓栞』)の項目で、仮字反の説とその周辺の記述が共通している。

(例9)

紅ベニ くれのある也。和名抄にもくれのあると訓ず。万葉にも呉藍とかけり。くれは呉也。紅花は呉国よりわたりにて其葉藍の如くなればくれのあいと云。のあの反ハはな也。

くれなる 万葉集に呉藍と書り。紅花をいふ也。倭名抄にくれのあると見えたり。のあ反な也。紅花はもと呉国より来る物也。今はべにの花と称せり。又西土に呉藍といふものは藍の類也。……

(整版本『倭訓栞』前編卷八・二九〇ウ)

仮字反の説は、それぞれ「のあの反ハはな」「のあ反な」であり、同様に「くれのある」が「くれなる」となることを示す。そして『倭名抄』や『万葉集』、「呉国より云云」の説など仮字反以外に共通している箇所がある。

また、次の(例10)のように、異なる仮名遣いで表記されているために、仮字反が異なっている。

(例10)

秧鶏カヘシ くいカヘシの反はき也。なは鳴也。きなく也。人のやどに来りなく鳥也。くいなのたゝくなど云も人のかどに来りなく也。

(『日本釈名』巻之中鳥類一〇・四六オ)
くひな 日本紀倭名抄に水雞を訓ぜり。されど秧雞を訓ずへし。くひ反き。来鳴の義。人家に来鳴鳥なるをもて哥にくひなのたゝく戸などよめり。……

(整版本『倭訓栞』後編卷六・一六オ)
ここでは、仮名遣いを『日本釈名』では「くいな」、『倭訓栞』では「くひな」としている。そのため、仮字反の説が「くいの反はき」、「くひ反き」と異なっている。『日本釈名』では、しばしば仮名遣いが歴史的仮名遣いによらない場合があるので、これを、『倭訓栞』において『日本釈名』の説を引用しつつ、仮名遣いを正したと見ることもできるため、『倭訓栞』の仮字反の説への影響に関して仮名遣いの違いはあまり関係がない。

また、次の(例11)のように、『日本釈名』に仮字反の説があったとしても、『倭訓栞』には該当する箇所が見られない場合がある。

(例11)

静搔ミカサ 箏の事をしづかにひくをすかがぎといふ。しづのかへしはす也。しづがぎ也。早がぎに對せり。

(『日本釈名』巻之中人事九・四〇オ)
すがゝき 哥におしねかるしづかすかかきとよめるは菅垣

『倭訓栞』における仮字反

成へし。○箏の譜にいへるは清搔の義なるへし。蘇合香の葉にすがゝきの説といふことありと体源抄に見えたり。……

(整版本『倭訓栞』前編卷一二・三ウー四オ)
つまり、『倭訓栞』では、引用したと思われる資料における説の全てが採用されているわけではないと言える。

『日本釈名』と『倭訓栞』の仮字反には共通する例はあるが、決して多くはない。『日本釈名』に仮字反があつても『倭訓栞』に採用されていない例もあることから、『倭訓栞』にある仮字反のほとんどは『日本釈名』の説を参考にしていないと考えられる。

ただし、この七例中六例で『日本釈名』の仮字反の説の前後の記述が『倭訓栞』の記述と似通っている箇所があり、仮字反の説以外に共通する記述が存在する場合がある。そのような場合には、典拠であると言つても良いのではないだろうか。

おわりに

本稿で取り上げた『和字正濫鈔』『東雅』『日本釈名』の関係をみると、『東雅』は『日本釈名』の説を否定し、その『日本釈名』は仮名遣いから見て『和字正濫鈔』には依っていないことから、それぞれ異なる説を持っていると言える。『倭訓栞』の仮字反は、その中で『和字正濫鈔』と『日本釈名』の説をそれぞれ部分的に採用している。『倭訓栞』が語形の変化・交替の説明に関

して、特定の説に依っていないと分かる。

『倭訓栞』における仮字反の説について、『和字正濫鈔』と『日本釈名』には典拠と考えられる例が幾つかあり、『和字正濫鈔』の(例5)や『日本釈名』の(例9)のように仮字反の説とその周辺の記述が似通っている場合には、典拠である可能性が高いと言える。ただし、仮字反の説とその周辺の記述が似通っている例は、決して多くはない。一方で、『東雅』の場合は語形の変化・交替に関して『倭訓栞』とは異なる説明をしており、仮字反の説については『倭訓栞』の典拠であるとは考えられない。

それとはまた別に、『和字正濫鈔』と『日本釈名』それぞれに『倭訓栞』の説と共通する箇所があることを考慮に入れると、この三者の間に何か内容的に似通っている別の資料があったのかもしれない。あるいは、士清独自の説であることも考えられなくはないが、少ないとは言ってもこれだけ『和字正濫鈔』や『日本釈名』と似通っている箇所があるので、先行する説に全く依らなかったとは考えにくい。それとも、仮字反の説は特定の資料によるのではなく、国学に関する講義などで聞いたものや巷で流布していたものなど、間接的な知識によるものだったのかもしれない。そして、そのような説は当時、出典が明記されない性格のものであった。

例えば、当時の国学者の著作で、本居宣長の『古事記伝』¹⁷や賀茂真淵の『続万葉論』¹⁸を見ると、出典を挙げる際、書名を挙げる場合もあれば、「契沖云」「頭昭云」「谷川氏が……」などと

人名をあげることも多い。また、「師ノ云フ」や「或説に」「一説に」などとして具体的な出典をあげないこともある。書名でなく人名を挙げて説を引用することや、あるいは出典を明記しないことは、『倭訓栞』に限ったことではなく一般的なことであったと言える。そして、当時の一人の執筆数を考えても、例えば、本居宣長は『古事記伝』はじめとする二〇点以上の著作があり、当時としては多い方であるが、その程度である。「……氏」と言えほどの書物を指すか分かる程の数であつただろう。よって、わざわざ書名を記す必要がなかったのではないか。『倭訓栞』でも「……氏の説」として、契沖・新井白石・貝原益軒の説を引用していることは明らかであるが、それがどの書物によるものかは当時の人々にしてみれば明記しなくとも当然のことだったのかもしれない。仮字反の説に関しても同様に、出典を挙げなくても典拠が分かるものであつただろう。いずれにしても、『倭訓栞』の仮字反には何か資料や講義での間接的な知識など、参考にしたものがあつたと考えられる。

このように、『倭訓栞』における仮字反の説は、特定の一資料あるいは一説を参考にしていてのではなく、士清が様々な説を吟味し検証したものであり、多様な説を用いていると言える。

謝辞

末尾ながら、貴重な資料の閲覧をご許可下さいました石水博物館と塚澤洋氏に、この紙面を借りて深く感謝申し上げます。

〈注〉

- (1) 三澤成博『『和訓栞』の依拠した鷹詞文献』（『鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』汲古書院、一九九七・四）
- (2) 『日本国語大辞典』（第二版）三（小学館、二〇〇一）
- (3) 『倭訓栞』は、現在でも方言や語源などの研究に用いられることがあるが、使用には注意が必要である。編者の土清は、整版本（第一回）刊行の前年に亡くなっており、その後は子孫や門人らが編纂し刊行作業を行い、五回に分け一〇年かけて刊行した。その間に項目の説明にも後人の手が入っていることは、三澤薫生『『和訓栞』の諸本と使用上の注意』（『土清さんく谷川土清生誕三百年記念誌』谷川土清生誕三〇〇年記念事業実行委員会、二〇二一・一）に詳しい。
- (4) 三澤薫生『『和訓栞』の諸本と使用上の注意』（『土清さんく谷川土清生誕三百年記念誌』谷川土清生誕三〇〇年記念事業実行委員会、二〇二一・一）
- (5) 清逸本とは、四〇冊から成る石水博物館所蔵本（平成三年五月に閲覧）で、現存しない稿本である景慎本（安永五年（二七七六）夏から安永六年（二七七七）九月までに河北景慎によって書写されたもの）の写しであることが識語から分かる。
- (6) 本文で使った『倭訓栞』について、基本的には三重大学附属図書館所蔵本を用いたが、これは前編巻二九から巻三八（まうお）が存在しないため、調査の便宜上、整版本前・中編『倭訓栞』（明治十五年刊。国文学研究資料館所蔵本（マ3・9・11・64）〈所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース〉（<http://babel.nijl.ac.jp/info/b/meta-pub/KTWSearch.cgi>））と、整版本後編

『倭訓栞』における仮字反

『倭訓栞』（明治二〇年刊。国文学研究資料館蔵本（マ3・51・11・18（同上））を使用した。そして、確認のため全巻揃いの三重県立図書館所蔵本（三浦源助前・中編（明治十五年）・後編（明治二〇年））を併用した。

- (7) 『鯨屑譚』（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第 期六、吉川弘文館、一九七五）
- (8) 石水博物館所蔵本。三澤薫生編著『倭訓栞 谷川土清自筆本 影印・研究・索引』（勉誠出版、二〇〇八）
- (9) 『和字正鑑鈔』（福井久蔵撰輯『仮名遣』（国語学大系九）厚生閣、一九三九）二〇六一―二二六頁
- (10) 三澤成博『『和訓栞』の依拠した鷹詞文献』（『鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』汲古書院、一九九七・四）二頁下段
- (11) 『東雅』（市島謙吉校注『新井白石全集』第四、吉川半吉、一九〇六）一―三九三頁
- なお、松村明・尾藤正英・加藤周一校注『新井白石』（日本思想大系三五、岩波書店、一九七五、一〇二―一二九）に倣って、『東雅』の引用文中での『日本釈名』の引用は鈎括弧で示す。
- (12) 三澤成博『『和訓栞』の依拠した鷹詞文献』（『鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』汲古書院、一九九七・四）一頁下段
- (13) 三澤成博『『和訓栞』の依拠した鷹詞文献』（『鷹詞より見たる『和訓栞』の研究』汲古書院、一九九七・四）一頁下段
- (14) 『日本釈名』（元禄一三年（二七〇〇）刊。国文学研究資料館所蔵本（マ3・37・11・3（注6に同じ））
- (15) なお、歴史的仮名遣いでは『秧鶏』は「くひな」である。
- (16) 『日本釈名』には、しばしば仮名遣いに誤りが見られる。『日本古典文学大辞典』（岩波書店）によれば、『日本釈名』はその四年前に刊行された契沖による仮名遣い研究書『和字正鑑鈔』に依っていないということである。
- (17) 『増補本居宣長全集』一（吉川弘文館、一九二四）
- (18) 『賀茂真淵全集』一一（統群書類従完成会、一九九二）

【まえだ ゆか 本学大学院修了生】